

# 塙の線香

46期生

## I テーマ設定の理由

昨年、一昨年と自分でも内容がむずかしかったと思うので今年もっと自分にとって身近なものにしようと思った。そして自分の住んでいる街の伝統産業について調べようと思い、線香について調べることにした。なぜ自転車にしなかったのか？という塙の自転車はメジャーすぎるのである。だから、あまりメジャーでもなく深い歴史を持っている線香にしようと考え、設定した。

## II 研究方法

- ・文献調査 図書館へ赴き文献を調べる。(夕陽ヶ丘図書館・塙中央図書館大仙支館)
  - ・現地調査 市内の線香屋を訪ねて話をきく。(株式会社梅栄堂)
- これらの研究をまとめて自分の考察をだす。

## III 研究内容

### 1 線香とはどんなものか？

#### (1) 線香の歴史

日本でもっとも古い香料の記録は“日本書紀”にある。

“推古3年(595)4月、一かかえもある‘沈水’が淡路島に漂着した。それと

知らぬ島民が薪にして燃やしたら香煙があたりがちこめた。驚いて献上した”というものである。記録中の‘沈水’が日本で記録される最古の香料である。実際香料は仏教の焚香料として仏教と供に日本にやってきた。その証拠として在来宗教(神道など)には香料(当時は供香と呼んでいた)を利用するしきたりはない。

754年、鑑真が来日したころ焚香料は空香と呼ばれるようになっていた。また鑑真が来日した際たくさんの香料をもってきた。その香料を合わせることによって新しい香りをだすなどした。これらを合わせ香という。

平安時代では香料の香りを衣服につける囊比香がはやった。囊比香は後世では香囊に香を入れるようになった。化粧的な扱いをうけるようになった香料だが貴族の趣味としてとどまっていた。

室町時代、日本独特の香道というものが生まれてきた。香道というのは後で記述するがいくつかの香の匂いを嗅きわける遊びで日本三大芸能の一つである。そして香の匂いを嗅ぎわけることから“香を嗅ぐ”という言葉は“香を聞く”というように変わり聞香というようになった。

ところで記録の中に線香という言葉が記されたのはこのころである。中国では1578年“本草綱目”日本では1548年“運歩色葉集”にそれぞれ記されている。記録上では日本のほうが古い、線香の発祥地は中国である。日本での発祥地としては塙と長崎

の二説があるが、今日では堺説が有力である。

江戸時代にもなると香料は化粧品として庶民層に普及した。しかしながらその江戸時代に作られた文化も明治5年ごろからおこった廃仏毀釈運動によって線香以外の香料は衰退してしまった。また線香自身も大打撃をうけている。

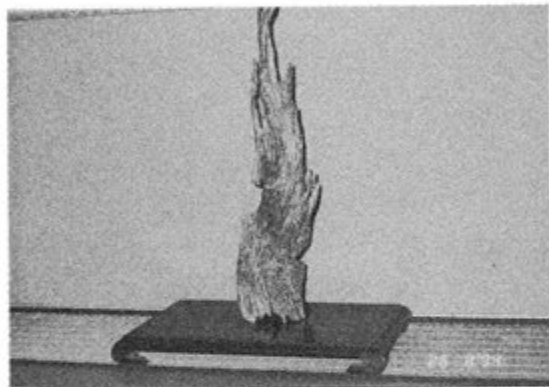
## (2) 線香の作り方 ～1. 材料～

線香は基本的に香料をメインとして他に接着剤、整形剤、染料等からできている。その一部をあげると、

- ・伽羅・沈香——ジンチョウゲ科の常緑植物。老木を数年放置したのち樹脂分だけを採集したものを沈香。その高級品を伽羅という。

(右写真参照)

- ・白壇——インド主産のビャクダン科の常緑喬木、心材は香料に、他は彫刻に使われている。また伽羅や沈香とちがいかかなり強い臭いがした。下の写真は、その彫刻で一つ一つが手作りだそうである。(そのためとても高い)
- ・麝香——代表的な動物香料。カモシカに似た麝香鹿(ジャ



▲P-1 伽羅(キャラ)

コウジカ)のオスの香囊から採取。香気を保存させる力が強い。動物特有の動物園の匂いがした。

- ・桂皮——クスノキ科の常緑喬木、樹皮をはぎとり乾燥させたものを桂皮とよぶ。一般的にシナモンの名前で親しまれ匂いの強いものを高級とする。
- ・楠(タブ)——クスノキ科の常緑樹。樹皮は粉末にして線香の粘着剤に用いられ、これをタブ粉という。

以上が線香材料の一部である。

他にもいろいろ種類があるがここでは省略しておく。この中でも伽羅や沈香、白壇というのはそれ一つだけでも立派な商品になっている。P-1の伽羅は1kgあたり6百万円というとんでもないものだし、P-2の彫刻品も何万もするなど線香の材料は高価なものが多い。また植物材料の特徴として常緑植物であることがあげられる。一部の例外を除けば全て常緑樹である。

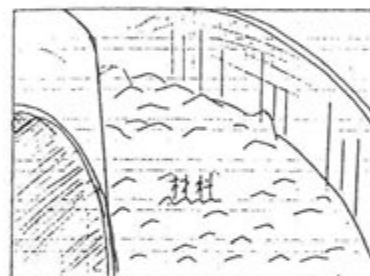


▲P-2 白壇(ビャクダン)の彫刻品

## (3) 線香の作り方 ～2. 製造～

線香は(2)であげた香料をメインとして作られている。明治以前の製造工程に関する資料はないらしい。明治以降に一部の工程で機械が導入されたくらいで現在も大部分は伝統的な手工業で製造されている。(数字横の☆印は機械を導入した作業であることを示す)

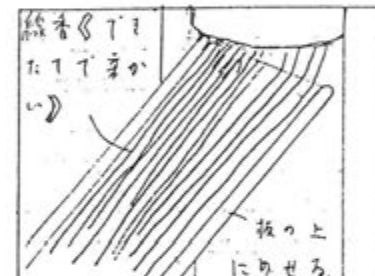
- 1 原料保管 諸原料は袋につめて湿気をさけて、粉末状にして保管する。  
↓
  - 2 調合 中級以下の素材の調合は雇用者にまかせられるが高級品の調合は経営者が自ら行う。香料の調合率は季節により微妙に変化する。  
↓
  - ☆3 ふるい 香料から不純物を取り除く作業。今は機械の仕事になっている。  
↓
  - ☆4 こね、練り 原料を攪拌機にかけて攪拌する。ここで染料を加える。この作業も明治時代に登場した攪拌機によって機械化が進んだ。  
↓
  - ☆5 玉揚げ 練りの終わった原料を玉揚げ機にかける。そして水で放熱させる。  
↓
- ここまでが翌日のための準備段階である。



▲P-3 攪拌(カクハン)機

←図の左側にあるローラーで材料をひきのばす。これが攪拌機の仕事である。

→ところてんのようにグニャアっと出てくるできたての線香はまだ柔らかいらしい。



▲P-4 押し出し機

- ☆6 押しだし これが機械化されることによって次の盆切りが楽になった。  
↓
- 7 盆切り 6→7への作業は連続するため盆切りが一番熟練が必要である。  
↓
- 仕事としては、線香の板上に整列させ長さを整える作業。
- 8 生(ナマ) 盆切りによって揃えられた盆板上の生地を乾板に移しかえる。  
↓
- そのときに長さのちがう不良品をはじく、必要な道具は竹べら1本だけ。
- 9 胴切り 原料を用途別に切り揃える。ここからは不良品再生が困難になる。  
↓
- 10 乾燥 その名の通り乾燥させる。かかる日数は約10日である。設備はそんなにないが、とんでもない面積が必要である。  
↓
- 11 結束→包装 ここのパートタイマーの人によって手でされている。

ぼくが工場を見学したとき10人も人がいなかった。よくて7～8人というところである。しかし仕事は11種類もあるのでとても追いつかない。つまり業界では泣く泣く機械化を進めたということになる。その証拠として、盆切りや乾燥といった大事な部分は機械はあっても主動でしている。ここに伝統品のこだわりというのが見えた。しかし練りや玉揚げを機械化しているところからみて限界というのも実感させられた。

## 2. 堺の線香の歴史

### (1) 明治時代

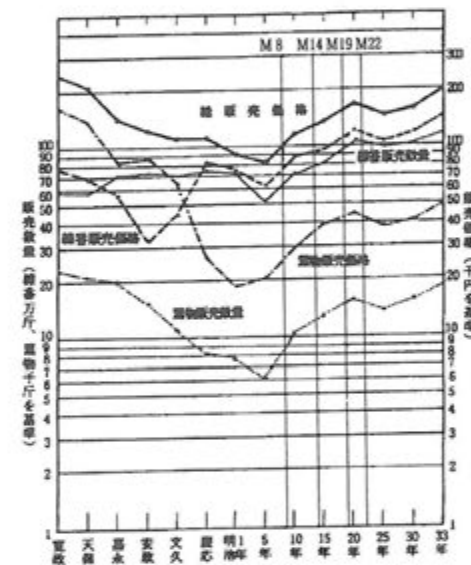
江戸時代以前の線香業界の資料はほとんどないので明治時代からのスタートとする。まず明治8年、堺県税課の命令で県内の沈香屋、線香屋を合併し、一つの組合とされた。そして明治14年大阪府甲第二百二拾二号の達により仲間規則を制定し、府知事に認可された。さらに明治19年に堺薫物線香商組合と称され、明治22年には組合規則が認可される。ところでその組合規則のことだが、はっきり言って現在いろんなところにある組合規則と同じようなものである。このことより明治時代のころから商業の自由化というものがうかがえてくる。

ところで販売状況はどうだったのだろうか？下図は寛政期から明治33年までの売り

上げである。販売価格で薫物と線香を比較すると明らかに薫物のほうが高価である。しかし寛政期に数量、価格が急激におちこみそれ以降回復することはなかった。原因として線香と薫物を合併したことがあげられる。また、その結果現在では薫物という名称が消えてしまっている。ところで明治5年にほとんどのものが最悪を示しているのはなぜだろうか？これは明治維新直後の廃物股積運動の影響のようである。その生き残り策として明治8年に組合を使ったのだろうか？当時の人たちは“明治維新後仏教の一時衰えたる故に、其影響を受けたるも其後仏教の旧態を維持せんと交通の便が開けるに従い販路の拡張を謀る”つまり一時的な衰退を交通の便によって回復したというものである。明治時代交通の便がよくなったことで商売相手をふやすことによって倒産をまぬがれたのである。ところで線香は安政期に最低を示している。ほくは品質が暴落したのだと思う。その後価格がもちなおしているところを見ると品質は再び向上したのだろう。そしてこの安政期のスランプがあったからこそ、廃仏股積運動の中でも生き残ることができたと思う。

明治時代末期“古今形勢、興廃競べ”では様々な新旧の交替を反映して、流行の部と府流行の部に分けられた。流行の部には西洋文学などが軒を並べる中、線香は不流行の部前頭34枚目というなげかわしい成績におわっている（次ページ参照）。ところでそのころから線香の機械化がはじまった。（攪拌機・押し出し機が開発されたのもそのころである）ところが明治43年“堺繁宮鑑”によると“香料屋10、香料とするものが1”とあるだけで線香屋がない。ここまで堺の線香の権威はおちたのだろうか？明治時代というのは文明開花など明るさが見られるが、線香業界にとっては暗黒の時代だったとまとめることができる。

▼図1 明治の販売状況（堺の薫物線香）



▼図2 資料 明治の興廃競



▼図3 資料

附香物産工市場		
年	正	大
行	行	行
1	...	...
2	...	...
3	...	...
4	...	...
5	...	...
6	...	...
7	...	...
8	...	...
9	...	...
10	...	...
11	...	...
12	...	...
13	...	...
14	...	...
15	...	...
16	...	...
17	...	...
18	...	...
19	...	...
20	...	...
21	...	...
22	...	...
23	...	...
24	...	...
25	...	...
26	...	...
27	...	...
28	...	...
29	...	...
30	...	...
31	...	...
32	...	...
33	...	...
34	...	...
35	...	...
36	...	...
37	...	...
38	...	...
39	...	...
40	...	...
41	...	...
42	...	...
43	...	...
44	...	...
45	...	...
46	...	...
47	...	...
48	...	...
49	...	...
50	...	...

### (2) 大正時代

まず上の2つを見比べてほしい。その中でも自転車と線香の2つに注目すると自転車は前頭8枚目から4枚目と上がっている。まとめると少しあがっているという程度だろうか。ところで線香は？というと明治時代には前頭34枚目しかも香道具という名称だったのが、大正時代には線香という名前前で前頭3枚目にまで上がっている。約5年間で破格の上昇である。これは一体なぜだろうか？堺において線香製造の機械化は大正末期から昭和初期にかけてであるのであてはまらない、ということでは線香の品質の向上というのが主原因であると判断した。

### (3) 昭和中期～現代

線香業界は昭和28～48年にかけて生産額が大幅にあがっている。しかし借金の額（資本金の2～5倍）を見るとかなり無理をしていることが分かった。この時期は高度経済成長期だったので後のみかえりを考えた策と思った。

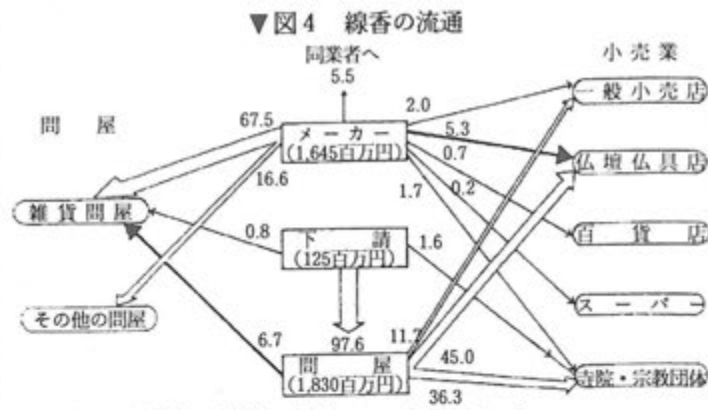
その中でも最大の問題は雇用問題といえる。パートタイマーでは線香製造の中核部分の仕事は不可能であるが若い人間はなかなかやってくない。70歳以上の高齢者も数名いるくらいなのである。また生産量の減少にともなって高級品が生産されるようになった。ますます大変である。その結果庶民から線香という物がはなれてゆき自分の首をどんどんしめてしまった。

さて現在はどうであろう？全国比でみると堺は約10%、10本に1本は堺の線香という計算である。近年淡路島の線香が強くなっておされぎみなのも確かである。次に流通であるがこれは、次項の図4のとおりである。ちなみにこれはアンケート調査らしい数字は売上高に対する割合である。まずメーカーは雑貨問題向けが67.5%となり他の問屋と合わせると約85%を問屋に発送している。問屋の売上高が一番多いのは自社でも作っていることやメーカーからの利子を含むからである。その問屋以外のメーカーや



下請けは売るところがほぼ固定されているのがわかる。それは固定の相手をもつことによって利益を確保しようというものである。

ところが、その主要な取引先以外からの発注が年々減ってきている。そこでどこの企業でも“販売員”というものを置いて顧客との連絡、販路の拡大につとめている。



#### IV 結論と総括

堺の線香業界は、旧堺の街の堀の内側にある。これが堺の線香の歴史を物語っていると思う。ところでその線香業界だが、大企業に対抗するため高級品をどんどん開発している。ところがその大企業も高級線香に手をだしはじめた。それによってますます庶民から線香というものがなくなり、流通も減っていくのではないだろうか。しかし堺の線香には“手づくりのよさ”というものがある。それをキャッチコピーにでもしてどんどん売っていくとまだこの時期をのりこえることができるだろうと思った。

#### V 参考文献

- ・堺の伝統産業——堺市経済局工業課（S 60. 発行）
- ・堺の伝統産業——堺市経済部商工課（S 47. 3 発行）
- ・マンガ堺の伝統産業——堺市中小企業振興会
- ・泉州の地場産業——南海道総合研究所（S 56. 5 発行）
- ・匂い、香り、禅——関口 真（S 47. 11 発行）
- ・香道～歴史と文学～——三篠西 公正（S 46. 8 発行）
- ・株式会社梅栄堂のパフレット——梅栄堂
- ・堺の伝統産業——堺市中小企業振興会（H 5. 3 発行）
- ・四訂版 中学総合歴史——正道社編集部
- ・中学白地図——東京法令出版

- ・図1 堺の伝統産業 堺市経済局工業課
- ・図2 堺の伝統産業 南海道総合研究所
- ・図3 泉州の地場産業 南海道総合研究所
- ・図4 堺の伝統産業 堺市経済局工業課